

# 親子相互の信頼感が高校生の自我同一性に及ぼす影響について

山 田 正 樹

## 〔抄 録〕

「自分とは何者か?」、「自分のすすむべき道はどのようなものか?」といった自己に対する認識である自我同一性の感覚は、青年期において最も顕在化される発達課題である。本研究では信頼感という概念を取り上げ、青年期における自我同一性形成に及ぼす影響を親子相互の信頼感という関係性の中から検討した。

高校生とその両親に対して質問紙調査を実施し、高校生の自我同一性地位ごとに親子相互の信頼感の特徴を検討した。その結果、自我同一性地位ごとに特徴が認められ、親子相互の信頼感が自我同一性の形成にとっても重要であることが示された。

キーワード：自我同一性、信頼感、親子、高校生、青年期

## I. 問 題

「自分とは何者か?」、「自分のすすむべき道はどのようなものか?」といった自己に対する認識である自我同一性の感覚は、青年期において最も顕在化される発達上の課題であるとエリクソンは述べている (Erikson, 1950/1977)。

エリクソンは、人間の発達を生涯発達の視点で捉えた点で、それまでの人間の発達論の主流であった乳幼児期を主とした発達論とは一線を画した。エリクソンによると、人間の発達は、各段階で解決されねばならない「各段階特有な発達上の課題」 phasespecific developmental task によって特徴づけられるという。青年期において顕在化される発達上の課題が自我同一性・対・自我同一性拡散である。エリクソンは、自我同一性を幼児期以来形成されてきたさまざまな同一化や自己像が、青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する、統合された自我の状態であると定義した。また、この統合には、時間的・空間的な変化における斉一性・連続性の自覚と、自己認識と重要な他者からの期待の合致の自覚という形態があるとした (Erikson, 1950/1977)。現在の自我同一性研究においては、後者の側面への関心が高まっている。すなわち、自我同一性形成は、他者からの分離や自律によってのみでなく、他者との関係

性の中で起こることが強調されている(杉村、1998)。そこで、本研究では信頼感という概念を取り上げ、青年期における自我同一性形成に及ぼす影響を他者との信頼感という関係性の中から検討する。

従来において自我同一性形成に信頼感が及ぼす影響についての実証的な研究は少ない。天貝(1995)が男女高校生を対象に、発達上の課題である自我同一性形成を取り上げ、形成の上で信頼感が及ぼす影響について検討している。天貝の研究では、信頼感の対象を、「対自的信頼」、「対他的信頼」、「不信」の3つの側面から取り上げている。

本研究では、「対他的信頼」という対人関係の側面を青年期の自我同一性形成に大きく影響を及ぼすであろう、青年の両親との関係に絞り、研究を行いたい。現代日本の青年の自我同一性形成にとって、その同一化の対象となる両親の存在は、大きな影響を与えていると思われる。天貝の研究では、漠然とした対人関係のみを扱っており、対人関係の側面は両親といった特定の対人関係に絞られていない。

また、エリクソンは、青年を世話する人々との関係が「有意義な相互作用に対する一連の潜在能力の発現継起」をつくり出す(1959/1973、P.55)。すなわち、自我同一性の形成に及ぼす影響として、青年を世話し、養育する人々との関係の重要性を指摘している。

エリクソンの記述(1959/1973、P.68)や天貝(1995)の先行研究からも示唆されるように、信頼感には他者へと自分への信頼の2つの方向性が示される。よって、本研究では信頼感を“自分は信頼できる価値のある存在であるかどうか”という自分への信頼と、“自分にとって他者は信頼できる存在であるかどうか”という他者への信頼の2つの方向性を持つものとする。

自我同一性の発達の研究における測定論的な研究の代表として、マーシャ(Marcia, J.E.)の研究があげられる。マーシャはエリクソンの記述を吟味し、自我同一性を獲得した状態を自我同一性達成状態と考え、この達成状態を地位 status と名づけた(鑑、2002、P.276-277)。

マーシャ以前の研究の多くは、自我同一性の危機の両極面、すなわち、自我同一性達成・対・自我同一性拡散の特徴を問題としてきた。しかし、それらは、自我同一性が達成された時に示される特徴を調べているため、どの程度の自我同一性が達成されたかを明確に把握できるような、「心理・社会的基準」psycho-social criteria が不明瞭である。つまり、ある「自我同一性」は、簡単に獲得され、別の「自我同一性」は、大きな苦勞を伴って得られている(鑑ら、1984、P.69)。マーシャは、エリクソンの記述の中から心理・社会的基準として、「危機」crisis と「自己投入」commitment の2つの基準を取り上げた。

「危機」とは、いかなる役割・職業・理想・イデオロギー等が自分にふさわしいかについて、迷い、考え、試行することであり、「自己投入」とは、自己定義を実現し、自己を確認するため、独自の目標や対象への努力を傾注することとされている。自我同一性の概念は多様であり、自我同一性を多次元からとらえようとする立場がある。マーシャ以降、「危機」および「自己投入」が自我同一性をほぼ必要十分に規定すると考えられ、実証的な研究がなされてきている(天貝、

1995、P.367)。

マーシャは、「危機」と「自己投入」の2つの心理・社会的基準の様態から、アメリカの青年の研究を行い、4つの地位を見出している。4つの地位とは、①自我同一性達成地位 identity achievement status、②早期完了地位 foreclosure status、③モラトリアム地位 moratorium status、④自我同一性拡散地位 identity diffusion status である。2つ目の地位であるforeclosure に関しては、予定型 (鑑、2002) や権威受容地位 (加藤、1983) と日本語に訳されたりもしている。

## Ⅱ. 目 的

本研究では、自我同一性形成に影響を与えると思われる信頼感を測定する尺度を作成し、その信頼感尺度を用いて親子相互の信頼感が自我同一性形成に及ぼす影響について検討することを目的とする。具体的には、青年に対して両親への信頼感の調査を行い、またその両親に対しても青年に対する信頼感の調査を行いたい。これまでの研究では目が向けられてこなかった青年期における親子相互の信頼感をみていくことに本研究の独自性がある。

## Ⅲ. 方 法

### 1. 調査測定

#### 1) 自我同一性の測定

マーシャの自我同一性地位を質問紙において検討した加藤 (1983) による同一性地位判定尺度を用いる。加藤は、①「現在の自己投入」の水準、②「過去の危機」の水準、③「将来の自己投入の希求」の水準の3変数を測定し、その組み合わせによって自我同一性地位を測定する同一性地位判定尺度を作成した。加藤による同一性地位判定尺度によって、マーシャの4つの

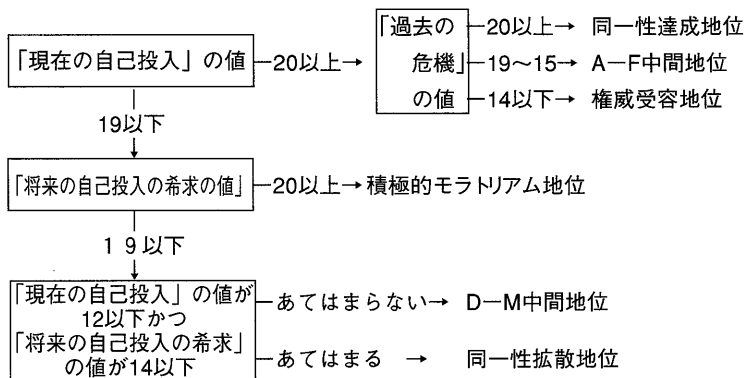


FIGURE 1 各自我同一性地位への分類の流れ図

自我同一性地位に達成－権威受容中間地位（A－F中間地位）と拡散－積極的モラトリウム中間地位（D－M中間地位）の2つの中間地位を加えた6つの地位に分類する。同一性地位判定尺度を構成する3つの変数をもとに、各自我同一性地位への分類は、FIGURE 1に示した流れ図に従って行われる。

## 2) 親子相互の信頼感の測定

高校生が抱く父親への信頼感と母親への信頼感を測定する目的で「父親への信頼感尺度」、「母親への信頼感尺度」を作成した。また、親子相互の信頼感を検討するという本研究の目的から、高校生の両親が子に抱く信頼感を測定する「子への信頼感尺度」を作成した。

「父親への信頼感尺度」、「母親への信頼感尺度」、「子への信頼感尺度」の項目については、信頼感に関する先行研究から得られた知見をもとに項目を作成した。すなわち、天貝（1995）による「他者への信頼感尺度」、谷（1998）による「対人的信頼感尺度」などを参考に作成した。また、本研究での対象は高校生としたため、高校生が両親に抱く信頼感、高校生の両親が子に抱くであろう信頼感を念頭において項目が作成された。高校生では、青年期後期にあたる大学生とは異なり、現実場面でも支えとなるような両親への信頼感も存在すると考えられる。

上記で得られた信頼感の項目について、臨床心理学専攻の大学教官1名および臨床心理学専攻の大学院生2名により、その内容が検討された。そこで問題点が指摘された項目については修正または削除を行った。その結果、「父親への信頼感尺度」項目として10項目、「母親への信頼感尺度」項目として10項目、「子への信頼感尺度」項目として10項目が残された。それぞれの尺度の回答は、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6件法で求めた。

## 3) 自分への信頼感の測定

本研究では、高校生とその両親が抱く自分自身への信頼感といった対自的な信頼感も検討する目的で天貝（1995）が作成した「自分への信頼感尺度」も同時に行う。尺度項目は、6項目で構成されている。回答は、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6件法で求められた。

## 2. 調査時期 2002年10月に質問紙調査を実施した。

## 3. 調査対象

関西の私立高校に通う男子高校生（高校3年生）に対して行った。調査対象となった高校は、家庭での教育への関心が比較的熱心な進学校である。なお、本研究では、自我同一性形成に不明な点が多いとされる女性を対象から除いた。

対象を高校生とした点については、大学生ではひとり暮らしをしている可能性も高く、両親

よりも他の対人関係が自我同一性に影響を及ぼしている可能性があるからである。このような点から、研究の対象を両親とともに暮らし、両親の影響が大きいであろう高校生とした。

また、親子相互の信頼感をみるという本研究の目的から、高校生の父親と母親にも調査を行った。

#### 4. 調査内容

高校生に対しては、「同一性地位判定尺度」(加藤、1983)、「父親への信頼感尺度」、「母親への信頼感尺度」、「自分への信頼感尺度」(天貝、1995)を行った。

高校生の父親と母親に対しては、「子への信頼感尺度」、「自分への信頼感尺度」(天貝、1995)を行った。

#### 5. 実施方法

高校生に対しては、質問紙による調査が授業時間内に調査者により実施された。父親と母親に対しては、質問紙を生徒に持ち帰ってもらい、後日回収する方式により実施された。高校生に行った質問紙の回収率は98% (255名)であった。父親に行った質問紙の回収率は28% (81名)であり、母親に行った質問紙の回収率は38% (93名)であった。その中で質問紙に完全回答をした高校生243名、その父親79名、母親89名を分析の対象とした。

### Ⅳ. 結 果

#### 1. 父親への信頼感尺度、母親への信頼感尺度、子への信頼感尺度の作成

##### 1) 因子分析に基づく項目の選定

まず、それぞれの尺度ごとに主因子法(回転なし)による因子分析を行なった。その結果、「父親への信頼感尺度」、「母親への信頼感尺度」それぞれに2因子が抽出された(TABLE 1、TABLE 2)。「子への信頼感尺度」では父親と母親の回答をそれぞれ別にして主因子法(回転なし)により因子分析を行なったが、それぞれ共に2因子が抽出され、似た構造が確認されたため、父親と母親の回答を一緒にして因子分析を行った。主因子法(回転なし)による因子分析の結果、2因子が抽出された(TABLE 3)。

「父親への信頼感尺度」項目では、1因子目が父親への信頼感を表す項目となっており、2因子目は父親の了解や納得を表す項目となった。また、固有値は第1固有値から5.52、1.22、0.86・・・と変動し、明確な1因子性が認められた。よって、本研究の信頼感を測定する目的から1因子目を父親への信頼感の項目として採用した。具体的に削除された項目としては、2因子目にも負荷量の高かった項目9と項目10が削除された。その結果、8項目が「父親への信頼感尺度」項目として採用された(採用された項目は、項目1、2、3、4、5、6、7、8

である)。1 因子目で説明された分散は、51.72%と十分に高い数字を示した。

「母親への信頼感尺度」項目でも同様に、1 因子目が母親への信頼感を表す項目となっており、2 因子目は母親の了解や納得を表す項目となった。また、固有値は第 1 固有値から 5.24、1.38、0.93・・・と変動し、明確な 1 因子性が認められた。本研究の信頼感を測定する目的から 1 因子目を母親への信頼感の項目として採用した。具体的に削除された項目としては、2 因子目にも負荷量の高かった項目 9 と項目 10 が削除された。その結果、8 項目が「母親への信頼感尺度」項目として採用された（採用された項目は、項目 1、2、3、4、5、6、7、8 である）。1 因子目で説明された分散は、48.82%とこちらも十分に高い数字を示した。

TABLE 1 父親への信頼感尺度の因子分析結果（質問項目、因子負荷量、共通性）

	Factor 1	Factor 2	共通性
これから先も父親を信頼していこう（項目 6）	. 921	-. 120	. 862
父親を信頼している（項目 3）	. 897	-. 093	. 812
本当に困った時には、父親を頼りにできる（項目 5）	. 801	-. 132	. 660
父親によって自分が精神的に支えられていると感じる（項目 1）	. 786	-. 051	. 620
父親の言うことは最もだと思う（項目 2）	. 755	-. 157	. 595
父親に悩みごとを気軽に相談できる（項目 4）	. 627	-. 014	. 393
父親といっても安心できない（項目 7：逆転項目）	-. 612	. 217	. 422
話せば父親は、私の考えていることに納得してくれるだろう（項目 10）	. 604	. 509	. 624
父親の決めたことに納得できない（項目 8：逆転項目）	-. 500	. 185	. 284
父親は一つ一つ了解を得なくても、私の決めたことを認めてくれると思う（項目 9）	. 555	. 695	. 792
固有値	5. 5	1. 2	
寄与率（%）	51. 7	8. 9	

TABLE 2 母親への信頼感尺度の因子分析結果（質問項目、因子負荷量、共通性）

	Factor 1	Factor 2	共通性
母親を信頼している（項目 3）	. 856	-. 082	. 740
母親によって自分が精神的に支えられていると感じる（項目 1）	. 834	-. 075	. 702
本当に困った時には、母親を頼りにできる（項目 5）	. 807	-. 181	. 684
これから先も母親を信頼していこう（項目 6）	. 798	-. 174	. 667
母親の言うことは最もだと思う（項目 2）	. 779	-. 140	. 626
母親に悩みごとを気軽に相談できる（項目 4）	. 653	-. 035	. 428
話せば母親は、私の考えていることに納得してくれるだろう（項目 10）	. 606	. 600	. 728
母親といっても安心できない（項目 7：逆転項目）	-. 598	. 199	. 397
母親の決めたことに納得できない（項目 8：逆転項目）	-. 377	. 198	. 181
母親は一つ一つ了解を得なくても、私の決めたことを認めてくれると思う（項目 9）	. 512	. 742	. 813
固有値	5. 2	1. 3	
寄与率（%）	48. 8	10. 8	

TABLE 3 子への信頼感尺度の因子分析結果 (質問項目、因子負荷量、共通性)

	Factor 1	Factor 2	共通性
子は私のことを理解してくれている (項目 8)	. 812	-. 297	. 747
子は私の思いをわかってくれるだろう (項目 6)	. 804	-. 386	. 796
子は私の気持ちがよくわかるだろう (項目 7)	. 791	-. 475	. 850
子を信頼している (項目 1)	. 758	. 281	. 654
ありのままに子を受け入れられる (項目 9)	. 733	. 147	. 559
子と一緒にいても安心できる (項目 2)	. 669	. 473	. 672
子に対して正直でいられる (項目 3)	. 634	. 331	. 512
子の悩みごとについて、一緒に考えていける (項目10)	. 614	. 065	. 381
子を最も理解している存在だと思う (項目 4)	. 575	. 032	. 332
子の決めたことに納得できない (項目 5 : 逆転項目)	-. 311	-. 064	. 101
固有値	5. 0	1. 1	
寄与率 (%)	46. 9	9. 0	

「子への信頼感尺度」項目では 2 因子が抽出された。固有値は、5.07、1.19、0.94・・・と変動し、2 因子が確認された。因子内の項目を検討した結果、1 因子目が子への信頼感を示す因子であり、2 因子目は子が親の思いや気持ちを理解してくれていると感じる因子となった。本研究での信頼感を測る目的から 1 因子目が子への信頼感を測る項目として妥当であると考えた。削除された項目としては、2 因子目にも .350 以上の負荷量を示した項目 2、項目 6、項目 7、共通性が著しく低い項目 5 が削除された。その結果、6 項目が「子への信頼感尺度」項目として採用された (採用された項目は、項目 1、3、4、8、9、10である)。1 因子目で説明された分散は、46.99%と十分に高い数字を示した。

## 2) 信頼性の検討

尺度の内部一貫性を検討するため、「父親への信頼感尺度」8 項目、「母親への信頼感尺度」8 項目、「子への信頼感尺度」6 項目に対して  $\alpha$  係数を算出した。「父親への信頼感尺度」では .909、「母親への信頼感尺度」では .897、「子への信頼感尺度」では .891 と高い信頼性を示した。折半法 (Spearman - Brown の公式) による信頼性の測定でも、「父親への信頼感尺度」で .904、「母親への信頼感尺度」で .878、「子への信頼感尺度」で .889 とこちらも高い信頼性を示した。これらの結果から、本信頼感尺度には十分な内的整合性があることが確認された。したがって、「父親への信頼感尺度」8 項目の合計点をもって子が父親に対して抱く父親への信頼感得点とし (逆転項目 2 項目を含む)、「母親への信頼感尺度」8 項目の合計点をもって子が母親に対して抱く母親への信頼感得点とする (逆転項目 2 項目を含む)。また、「子への信頼感尺度」6 項目の合計点をもって親が子に対して抱く子への信頼感得点とする。なお、信頼感が高いほど高得点になるようにされている。

2. 自我同一性地位ごとの子が抱く父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感

同一性地位判定尺度における3つの変数（「現在の自己投入」の水準、「過去の危機」の水準、「将来の自己投入の希求」の水準）をもとに、加藤（1983）の手続きにしたがって各自我同一性地位に分類した（TABLE 4）。拡散－積極的モラトリアム中間地位が全体の51.0%を占め、最も多い自我同一性地位であった。反対に、自我同一性拡散地位は全体の4.1%にしかすぎなかった。

TABLE 4 自我同一性地位の度数

自我同一性地位	度数	パーセント
自我同一性達成地位（A）	32	13.2
達成－権威受容中間地位（A－F中間）	46	18.9
権威受容地位（F）	14	5.7
積極的モラトリアム地位（M）	17	7.0
拡散－積極的モラトリアム中間地位（D－M中間）	124	51.0
自我同一性拡散地位（D）	10	4.1
合計	243	100.0

次に、自我同一性地位ごとの子が抱く父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感の平均と標準偏差、分散分析の結果を示す（TABLE 5）。分散分析の結果、父親への信頼感（F（5,227）=2.866、 $p<.05$ ）、母親への信頼感（F（5,236）=2.307、 $p<.05$ ）において自我同一性地位間に5%水準で有意な得点差が認められた。自分への信頼感（F（5,237）=9.470、 $p<.001$ ）についても、自我同一性地位間に0.1%水準で有意な得点差が認められた。多重比較（Tukey法、5%水準）を行ったところ（TABLE 5）、父親への信頼感の得点に関しては、達成－権威受容中間地位、権威受容地位>自我同一性拡散地位であった。母親への信頼感の得点に関しては、分散分析の結果、有意な得点差が認められたが、多重比較してみると自我同一性地位ごとに有意な差は認められなかった。自分への信頼感の得点に関しては、自我同一性達成地位、達成－権威受容中間地位、権威受容地位、積極的モラトリアム地位>拡散－積極的モラトリアム中間地位、自我同一性拡散地位であった。

TABLE 5 自我同一性地位ごとの父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感の平均と標準偏差

自我同一性地位	父親への信頼感		母親への信頼感		自分への信頼感	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自我同一性達成地位（A）	28.07	10.75	34.97	7.78	29.34	4.57
達成－権威受容中間地位（A-F中間）	32.88	10.55	34.76	9.89	28.09	4.31
権威受容地位（F）	34.29	7.42	36.14	7.44	28.93	3.97
積極的モラトリアム地位（M）	29.27	9.97	31.18	10.11	29.06	4.84
拡散－積極的モラトリアム中間地位（D-M中間）	29.38	8.19	31.98	6.95	24.80	4.89
自我同一性拡散地位（D）	23.40	10.79	29.00	9.46	22.30	7.63
分散分析（F値）	2.866*		2.307*		9.470**	
多重比較の結果（不等号で示す）	A-F中間、F>D		A、A-F中間、F、M>D-M中間、D			

\*\*\* $p<.001$ 、\* $p<.05$



### 3. 子の自我同一性地位ごとの親が抱く子への信頼感、自分への信頼感

高校生の自我同一性地位ごとの父親が抱く子への信頼感、父親が自分自身に抱く自分への信頼感、母親が抱く子への信頼感、母親が自分自身に抱く自分への信頼感の平均と標準偏差、分散分析の結果を示す (TABLE 6、7)。分散分析の結果、母親が子に抱く子への信頼感 ( $F(5,83) = 2.066$ ,  $p < .05$ ) において子の自我同一性地位間に 5 %水準で有意な得点差が認められた。母親が自分自身に抱く自分への信頼感 ( $F(5, 83) = 2.295$ ,  $p < .05$ ) についても、子の自我同一性地位間に 5 %水準で有意な得点差が認められた。多重比較 (Tukey 法、5 %水準) を行ったところ (TABLE 7)、母親が抱く子への信頼感の得点に関しては、自我同一性達成地位 > 自我同一性拡散地位であった。また、母親が自分自身に抱く自分への信頼感の得点に関しては、自我同一性達成地位 > 自我同一性拡散地位であった。

TABLE 6 父親が抱く子への信頼感、自分への信頼感の平均と標準偏差

子どもの自我同一性地位	父親の回答			
	子への信頼感		自分への信頼感	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自我同一性達成地位（A）	28.58	3.00	29.75	3.86
達成一権威受容中間地位（A－F中間）	28.80	3.49	27.87	3.56
権威受容地位（F）	28.67	1.53	27.00	3.00
積極的モラトリアム地位（M）	32.50	3.54	32.50	4.95
拡散一積極的モラトリアム中間地位（D－M中間）	27.63	4.00	27.05	4.26
自我同一性拡散地位（D）	25.75	3.40	26.75	2.50
分散分析（F値）	1.197		1.507	
多重比較の結果（不等号で示す）				

TABLE 7 母親が抱く子への信頼感、自分への信頼感の平均と標準偏差

子どもの自我同一性地位	母親の回答			
	子への信頼感		自分への信頼感	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自我同一性達成地位 (A)	30.53	2.83	30.07	3.15
達成一権威受容中間地位 (A-F中間)	28.24	3.47	26.94	3.67
権威受容地位 (F)	31.67	3.51	29.00	2.00
積極的モラトリアム地位 (M)	27.75	2.22	27.75	2.06
拡散一積極的モラトリアム中間地位 (D-M中間)	28.46	4.13	27.61	3.62
自我同一性拡散地位 (D)	25.00	2.83	24.50	3.70
分散分析 (F値)	2.066*		2.295*	
多重比較の結果 (不等号で示す)	A>D		A>D	

\*  $p < .05$

### 4. 子が抱く親への信頼感、自分への信頼感と「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」との関連

子が抱く父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感が、同一性地位を構成する 3 つの変数「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」をどの程度予測しうるかを調べるため、父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感各々の得点を説明変数、同一性地位判定尺度を構成する 3 つの変数各々の得点を目的変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った (TABLE 8)。

TABLE 8 父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感を説明変数、同一性地位判定尺度を構成する3変数を目的変数とする重回帰分析（標準偏回帰係数）

説明変数	過去の危機	目的変数	
		現在の自己投入	将来の自己投入の希求
父親への信頼感	-.049	.047	.087
母親への信頼感	.018	.165*	.131*
自分への信頼感	.192**	.400***	.381***
説明率（R <sup>2</sup> ）	.038*	.215***	.198***

\*\*\*p &lt; .001, \*\*p &lt; .01, \*p &lt; .05

その結果、同一性地位判定尺度を構成する3つの変数との間に有意な関連が見られた説明変数は、子が抱く母親への信頼感と自分への信頼感であった。まず、子が母親に対して抱く信頼感は「現在の自己投入」に対して $\beta$ （標準偏回帰係数）が正に有意な値（ $\beta=.165$ 、 $p<.05$ 、 $R^2=.215$ 、 $p<.001$ ）を示し、「将来の自己投入の希求」にも $\beta$ が正に有意な値（ $\beta=.131$ 、 $p<.05$ 、 $R^2=.198$ 、 $p<.001$ ）を示していた。また、子が自分自身に抱く自分への信頼感は「現在の自己投入」に対して $\beta$ が正に有意な値（ $\beta=.400$ 、 $p<.001$ 、 $R^2=.215$ 、 $p<.001$ ）を示し、「将来の自己投入の希求」にも $\beta$ が正に有意な値（ $\beta=.381$ 、 $p<.001$ 、 $R^2=.198$ 、 $p<.001$ ）を示していた。「過去の危機」に対しても $\beta$ が正に有意な値（ $\beta=.192$ 、 $p<.01$ 、 $R^2=.038$ 、 $p<.05$ ）を示していたが、その説明率（ $R^2$ ）は相対的に低いものであった。子が抱く父親への信頼感は、同一性地位判定尺度を構成する3つの変数に対していずれも有意ではなかった。

## V. 考 察

### 1. 作成された信頼感尺度の特徴

作成された父親への信頼感尺度、母親への信頼感尺度、子への信頼感尺度は、いずれも1因子性のものである。

父親への信頼感尺度に関しては、父親を信頼しており、父親を現実の課題場面でも信頼できる（項目5「本当に困った時には、父親を頼りにできる」、項目4「父親に悩みごとを気軽に相談できる」）だけではなく、精神的な拠り所として信頼している（項目1「父親によって自分が精神的に支えられていると感じる」）項目内容となっている。また、父親への信頼感の将来への時間的展望性（項目6「これから先も父親を信頼していこう」）をも含む項目内容となった。

母親への信頼感尺度も同様に、母親を信頼しており、母親を現実の課題場面でも信頼できる（項目5「本当に困った時には、母親を頼りにできる」、項目4「母親に悩みごとを気軽に相談できる」）だけではなく、精神的な拠り所として信頼している（項目1「母親によって自分が精神的に支えられていると感じる」）項目内容となっている。また、母親への信頼感の将来への時間的展望性（項目6「これから先も母親を信頼していこう」）をも含む項目内容となった。

子への信頼感尺度に関しては、子を信頼しているだけではなく、実際に課題場面に直面した時に子の気持ちを尊重しつつ共に考えていける信頼感のあり方（項目10「子の悩みごとについて、一緒に考えていける」）となった。

いずれの信頼感尺度も高い信頼性を示し、十分な内的整合性があることが確認された。しかし、構成概念的妥当性の検討や再テスト法による信頼性の検討も必要であったように思われる。今後の課題としたい。

## 2. 子が抱く信頼感と自我同一性地位

自我同一性地位に分類して、自我同一性地位ごとに子が抱く父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感をみていくと、地位ごとに信頼感に特徴があることがわかる。

結果から、権威受容地位については、父親を高く信頼していることがわかる。マーシャ（Marcia, 1966）が指摘するとおり、親のイデオロギーや信念を信頼しており、親のイデオロギーや信念を自分のものにしてしている自我同一性のあり方だと考えられる。また、自我同一性達成地位と権威受容地位の中間地位である達成－権威受容中間地位についても、父親への信頼感が高く、権威受容地位と同様に親を信頼し、親のイデオロギーや信念を自分のイデオロギーや信念として取り入れている中間地位であることが示された。権威受容地位や達成－権威受容中間地位の父親への信頼感に比べて、自我同一性拡散地位の子が抱く父親への信頼感は低いものであった。鏑（1974）は、自我同一性拡散地位の臨床的考察から、この地位の特徴として、自分と他人との心理的距離がうまくとれないと述べている。本研究においても、自我同一性拡散地位では親しい間柄であるはずの父親に対しても信頼がおけないものとして捉えており、うまく心理的距離がとれないことをうかがわせた。また、ドノバン（Donovan, 1975）は、自我同一性拡散地位の人々が述べる親像には無理解・無関心といった特徴が共通して認められること、成長過程において親に対する失望感あるいは恐怖感が強く体験されていたことなどを明らかにしている。本研究の結果においても、自我同一性拡散地位では父親に対して信頼できないものとして失望感すら感じていると考えられる。

子が抱く自分への信頼感については、自我同一性達成地位、権威受容地位、達成－権威受容中間地位、積極的モラトリウム地位が自分への信頼感が高かった。権威受容地位と達成－権威受容中間地位については父親への信頼感だけではなく、自分自身に向けられる信頼感も高いものであった。このことから、親のイデオロギーや信念を取り入れている自分自身に対しても疑いを持たずに強く信頼している姿が浮かびあがる。自我同一性達成地位や積極的モラトリウム地位は、父親や母親への信頼感も適度に持ちつつ自分自身を強く信頼している自我同一性のあり方だと考えられる。親から少し距離をとりつつも自分自身を強く信じて個を確立している、または確立しようと模索している自我同一性地位である。大矢（1999）は、TATを用いて自我同一性地位ごとに、その特徴を検討しているが、自我同一性達成地位の特徴として、課題場面

におかれた時に、自分の工夫で目の前の課題を乗り越えていく自律的な強さがあると述べている。本研究においても、自我同一性達成地位では自分への信頼感が高く自律的な自我同一性のあり方だと考えられる。それらの自我同一性地位に比べて、自我同一性拡散地位と中間地位である拡散－積極的モラトリウム中間地位の自分自身への信頼感は低いものであった。自己を探索する上で力となるはずの自分自身に対しても信頼できないものとして捉えているようだ。自我同一性拡散地位に関しては、父親への信頼感も低く、両親も信じることができない、自分すらも信じることができない、まさに拡散している状態だと考えられる。

### 3. 親が抱く信頼感と子の自我同一性地位

子の自我同一性地位ごとに、その両親が抱く子への信頼感と両親が自分自身に対して抱く自分への信頼感をみると、母親が抱く子への信頼感と母親が自分自身に対して抱く自分への信頼感に関して子の自我同一性地位ごとに特徴がみられた。

結果から、自我同一性達成地位の子を持つ母親は、高校生でありながら既に自分というものを確立して、自律した生き方をしている子を高く信頼していることがわかる。本研究で使用した「子への信頼感尺度」の特徴を考慮に入れて考えてみると、母親は子の選択や生き方を支持しており、個を確立した個人として子を認めている信頼関係のあり方だと考えられる。その信頼感のあり方に比べて、自我同一性拡散地位の子を持つ母親が抱く子への信頼感は低いものであった。自己を傾倒させておらず、模索もしていない自我の拡散状態にある子を信頼できないものだとみなしていることがわかる。

自我同一性達成地位の子を持つ母親が抱く自分への信頼感についても同様に、自我同一性拡散地位の子を持つ母親が抱く自分への信頼感と比べて高いものであった。自我同一性達成地位の子を持つ母親は、子を高く信頼しているだけではなく、自分自身に対しても高い信頼感を抱いていることが明らかになった。自我同一性達成地位の子を持つ母親からは、自分の能力を高く信頼して自律した生き方をし、個を確立した自分というものを感じさせる。母親自身が子の生き方のモデルとなることが考えられる。それに比べて、自我同一性拡散地位の子を持つ母親は、子への信頼感が低いだけではなく、母親が自分自身に対して抱く自分への信頼感も低いものであることが明らかになった。母親自身が自分を信頼に値するものだと感じられないのであるから、その拡散状態にある子は母親の生き方をモデルとできないことが考えられる。

### 4. 信頼感と「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」との関連

同一性地位判定尺度を構成する3つの変数と信頼感の関係について重回帰分析に基づいて検討すると、子が抱く父親への信頼感が「過去の危機」、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」の水準に及ぼす影響は、子が抱く母親への信頼感や自分への信頼感に比べて相対的に低いものであった。子が抱く父親への信頼感に比べて母親への信頼感、「現在の自己投入」、「将

来の自己投入の希求」の水準に影響があることが示された。また、子が自分自身に対して抱く自分への信頼感は、子が抱く母親への信頼感以上に、「現在の自己投入」、「将来の自己投入の希求」の水準に影響を与えるものであることが示された。これらの結果は、安定した母親への信頼感および自分への信頼感が、自我同一性の獲得にあたっても重要であることを示唆していると考えられる。つまり、個人の心の中に母親に対する信頼感や自分への信頼感が存在することによって、その信頼感が自己の傾倒や自己を探索する際の大きなサポート源になると予測される。特に、子が抱く母親への信頼感、子が自分自身に対して抱く自分への信頼感ともに、「将来の自己投入の希求」の水準よりも、「現在の自己投入」の水準の方により関連していた。この結果から、今のこの時点における積極的な自己の傾倒において、母親への信頼感、自分への信頼感が大きな影響を与えていると考えられる。一方、「過去の危機」の水準には、子が抱く父親への信頼感、母親への信頼感、自分への信頼感はほとんど影響を与えないものであった。

## VI. まとめと今後の課題

自我同一性地位ごとにその信頼感のあり方には特徴があることが示された。以下に、自我同一性地位ごとの信頼感のあり方について述べる。

自我同一性達成地位では、両親への信頼感は権威受容地位ほどに高くはなく、一定の距離を持っていることが示された。しかし、その母親が抱く子への信頼感が高いものであった。母親との関係を中心にしつつも、自分自身に対して抱く自分への信頼感も高く、現在積極的に自己を傾倒させ、目標に向かって自己のあり方だと考えられる。困難な事態に陥ったとしても、両親から守りを受け、内在化された両親像や自信をもとに困難を克服していくと考えられる。

権威受容地位では、父親への信頼感が高く、マーシャ (Marcia, 1966) が指摘するとおり、親のイデオロギーや信念を自分のイデオロギーや信念として同一化して、自我同一性を形成している地位だと考えられる。杉原 (1988) は事例による臨床的考察で権威受容地位では潜在的に自我同一性拡散傾向を持つ青年がいることを指摘している。しかし、本研究における権威受容地位の結果からは、自分への信頼感も高く、親のイデオロギーや信念が通用しない場面においても、ある程度の適応の良さをうかがわせた。信頼感という領域においては自我同一性拡散地位とは異なる特徴を示したと考えられる。

達成－権威受容中間地位では、権威受容地位と同様に父親への信頼感が高かった。この中間地位においても、権威受容地位と同様に親のイデオロギーや信念を自分のものとしている自我同一性のあり方だと考えられる。しかし、権威受容地位ほどには、父親への信頼感も高くなく、自我同一性達成地位と権威受容地位との中間地位であると考えられる。

積極的モラトリウム地位は、両親への信頼感も適度に持ちつつ、自分への信頼感が高いとい

う特徴を示した。親から少し距離をとっていると考えられるが、その父親が抱く子への信頼感、有意な差は認められなかったものの自我同一性地位の中で最も高いものであった。父親は子に入れ込んでいるとも考えられる。父親が信頼して認めているからこそ、子もまたモラトリウム状態であることができ、自己の傾倒を将来に延ばすことができるのではないだろうか。自分への信頼感も高く、意志決定をして一定の方向にさえ自己を傾倒させることができれば、高い適応を示すと考えられる。

自我同一性拡散地位は、父親への信頼感も低く、自分への信頼感も低いものであった。また、その母親からみても自我同一性拡散地位にある子は信頼できないものであった。母親自身も自分自身に対する信頼感が低く、子のモデルとなりえないと考えられる。石谷(1994)は、自我同一性拡散地位の特徴として、あてになる人物の不在による自己の不安定感と、一方で他者との関わりを拒むという対人スタンスの失調をあげているが、本研究においても自我同一性拡散地位では、あてになるだけではなくモデルとなるはずの親さえも信頼できないものと感じており、自分自身すらも信頼できない不安定な自己を示した。潜在的な病理を持つ予備軍として注意してみていく必要がある。

拡散-積極的モラトリウム中間地位は、自我同一性拡散地位ほどではないが、自分自身に対して信頼感が低い地位であった。自我同一性地位の分布が示すとおり、この地位が最も多い自我同一性地位である。この地位が示す特徴が現代青年の特徴を示すものなのかもしれない。自分自身に対して信頼感が持てずに、積極的に自己の傾倒を行わず、将来の自己の探索や模索も延期した状態であると考えられる。この地位の高校生が大学に進学すると、生き方に自信が持てなく何気なく大学生活を送るという近年の学生にみられる大学生活のあり方になるのかもしれない。

自我同一性地位を分けると、大きく2つの群に分かれると考えられる。1つ目は、自我同一性達成地位や権威受容地位、積極的モラトリウム地位にあたる群であり、もう1つは自我同一性拡散地位が属する群である。前者は、親子相互が信頼しあっており、安定した自我同一性を獲得している群である。後者は、親子相互の結びつきも弱く、自我同一性が獲得されていない群である。本研究で示されたように、親子相互の信頼感が自我同一性の獲得にとっても重要であった。エリクソン(Erikson, 1970)は、生涯を通して、自我同一性の中断や曖昧さを支える自我の強さと維持は、両親像や共同世界のモデルによるものであると述べている。本研究で明らかになったように、現実に関係できる両親は、現実場面において支えとなるだけでなく、内在化された親像としても青年の中に生き続け、青年が自我同一性を形成する上で重要な役割を担うと考えられる。

このように考えると、現代の高校生において最も多い拡散-積極的モラトリウム中間地位は2つの群のどちらに分類されるだろうか。今後、この地位の特徴をより詳しく調べていく必要があるように思われる。

また、本研究で作成された父親への信頼感尺度、母親への信頼感尺度、子への信頼感尺度の精度を高め、親子相互の信頼感が年齢を重ねるにつれてどのように変化していくのかについても、生涯発達の視点で研究を進めていく必要があると考えられる。

#### 〔引用文献〕

- 天貝由美子 (1995) 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371
- Donovan, J. M. (1975) Identity status and interpersonal style. *Journal of Youth and Adolescence*, 4, 37-55
- Erikson, E. H. (1950) *Childhood and Society*. W. W. Norton: 仁科弥生訳 (1977、1980) 幼児期と社会 1、2 みすず書房
- Erikson, E. H. (1959) PSYCHOLOGICAL ISSUES IDENTITY AND THE LIFE CYCLE. International Universities Press: 小此木啓吾訳編 (1973) 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- Erikson, E. H. (1970) Autobiographic Notes on the Identity Crisis. *Journal of American Academy of Arts and Science*, 99, 730-759
- 石谷真一 (1994) 男子大学生における同一性形成と対人的関係性 教育心理学研究, 42, 118-128
- 加藤厚 (1983) 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302
- Marcia, J. E. (1966) Development and Validation of Ego Identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558
- 大矢泰士 (1999) 自我同一性地位と青年期の個性化過程 - 集団施行TATに見る親表象との関係から - 心理臨床学研究, 17, 333-341
- 杉原保史 (1988) 自我同一性地位における早期完了型について——事例に基づく考察—— 心理臨床学研究, 5, 33-42
- 杉村和美 (1998) 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55
- 鑓幹八郎 (1974) 自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要, 23, 329-342
- 鑓幹八郎 (2002) 鑓幹八郎著作集Ⅰ アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版
- 鑓幹八郎、山本力、宮下一博 (共編) (1984) アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版
- 谷冬彦 (1998) 青年期における基本的信頼感と時間的展望性 発達心理学研究, 9, 35-44

#### 〔付記〕

本論文作成にあたり、御指導、御校閲下さいました石谷真一助教授、多くの御助言を下さいました先生方、調査に御協力下さいました多くの高校生とその御両親に心から感謝いたします。

(やまだ まさき 佛教大学臨床心理学研究センター)

(指導: 石谷 真一 助教授)

2003年10月15日受理

